

# 日本地衣学会

# No.88

# ニュースレター

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

目次	会務報告	319
	第23回青空地衣教室（千葉県銚子海岸）の記録	319
	念願のアナイボゴケ／越智典子	319
	お知らせ	321
	第26回 青空地衣教室（銀山平：栃木県日光市足尾）のご案内	
	— わたらせ渓谷鉄道に乗って足尾へ行こう — / 安斉唯夫・木下靖浩	321

## 会務報告 Report of the JSL Activities

### 第23回青空地衣教室（千葉県銚子海岸）の記録

Report of the 23rd Outdoor School on Lichens at Choshi Coast, Chiba-ken / ANZAI Tadao & KINOSHITA Yasuhiro

第23回青空地衣教室は、次のとおり千葉県銚子市の君ヶ浜海岸で開催されました。

開催日：2008年6月7日

講師：原田浩（千葉県立中央博物館）

参加者：11名（講師含む）

\* \* \*

君ヶ浜海岸での地衣類観察会は、これまでも2002年、2006年に千葉県立中央博物館主催の観察会として開催されており、馴染み深い観察場所です。銚子電鉄は以前とかわりなくゴトゴトと走り、醤油工場の脇をとって海鹿島駅（あしかじま）へと運んで行ってくださいまし

安斉唯夫・木下靖浩：地域活性化委員会関東

た。今回の観察会は好条件の干潮に恵まれたようで、これまでたどりつけなかった岩礁まで観察することができました。

君ヶ浜の魅力は、潮間帯から始まり小高い岩場を登りつめながら次第に地衣類が代わってゆく様子を体験することの出来ることにありますが、普段どうしても疎遠になりがちな痲状地衣をここでは一生懸命覗くことも魅力です。フジツボに囲まれて生き抜く地衣類イソシズミゴケには、次はいつ、どこで会えることになるのでしょうか。楽しみです。

### 念願のアナイボゴケ

Marine *Verrucaria* – I finally found it / OCHI Noriko

6月7日土曜日、千葉県銚子海岸で行われた第23回青空地衣教室に参加させていただきました。

講師は千葉県博の原田浩先生、参加者は世話人の安斉さん、木下さんをはじめ、中学生1名を含む10名でした。

越智典子：神奈川県

梅雨時で心配された空模様も、日焼けが気になるくらいの好天に恵まれ、潮が引きつつある海岸へと、銚子電鉄海鹿島駅から徒歩で向かいました。

ごつごつと岩の突き出た君ヶ浜の磯が、観察場所です。



図1. 観察場所と解説の様子。干潮で干上がった海岸で観察会を行った(左)。その岩の一つでアナイボゴケが卓越する黒色帯を示す原田講師(右；小林義弘撮影)。

原田先生は、ついさっきまで海水に浸かっていたらしい濡れた岩のかたわらに膝をつき、「ここにアナイボゴケ。岩肌が茶色っぽいのは、地衣体の色です。こちらの、かすかに緑色の部分はイソシズミゴケです」と、のっぺりと何もついてないような岩の表面を次々にルーペでのぞいては、指さしていかれます。ああ、念願の潮間帯の地衣類たち・・・わたしは、はやる気持ちを抑えつつ、ルーペをのぞきこみました。

「念願の」というのには理由があります。昨年九月に伊豆下田で開催された青空地衣教室で、原田先生が波打ち際から(ちょっとハンマーをふるわれて)拾い上げた岩のかげらに、よく見ると小さな黒い粒が4つ5つ。それが初めて見るアナイボゴケの子器でした。表面が濡れて反射するので、ぼけた写真しか撮れませんでした。その時ルーペでのぞいた印象も、知らずに見たら地衣はおろか、生きものとする思わないかもしれない・・・と

いうものでした。初めてこれを見つけた人は、どうして地衣だと見抜いたのでしょうか。何かの卵とか糞とか、海藻の芽とは思わなかったのでしょうか。それにしても、海と陸の境目にこんなふうに小さな地衣が、まるで太古に海から陸地が上がってきた様子を再現するみたいに生きているなんて、観察会から日が経つにつれて、ますます気になって、もう一度潮間帯の

地衣が見たい、できれば自分で見つけてみたいと思うようになりました。じっさい、三浦半島の海岸で一人で探してもみたのですが、自力では見つけることはできませんでした。

「海岸性の地衣の観察会を、ぜひもう一度・・・」そんな願いが、こんなに早く実現するなんて夢のようでした。季節もよく、大潮で干潮の時間が観察会に適していて、その日の天気もいいという、きびしい条件を満たした上に、土日が祝日で、という条件もあったでしょう。わたしは今回の企画をしてくださった方たちへの感謝と、期待でいっぱいになって、観察会に臨んだのでした。

さて、いざルーペを当ててはみたものの、アナイボゴケもイソシズミゴケも、なかなか見つけられません。相手はわずか0.1ミリから0.2ミリという子器や粉子器です。黒っぽい砂粒と思っているものが、じつは・・・ということだって、あるかもしれません。目当てのもの



図2. 観察された地衣類。ホシスミイボゴケ(左；小林義弘撮影)。アナイボゴケの仲間(右)。

が視野に入っているのかどうかすら確信がもてなくなりました。他の人はどうかしら、と見回すと、どうやらわたしと同様、首を傾げている様子です。というのに、原田先生は「ここにも、ここにも」と肉眼で見当をつけては、ルーペでのぞき、アナイボゴケかイソシズミゴケの子器や粉子器をとらえていきます。そのうち、「おー、見えた」「あ、わかった!」という声があちこちから聞こえ出しました。わたしは、ひたすら無言

でした。

きっと見つかる、と自分に言いかけ根気よくルーペを当てていきました。すると、ふいに見えたのです、ほちりと小さく黒い粒が、アナイボゴケの子器でした。以前ちらりと見たのとはちがい、噴火口のある、すそつぼまりの火山・・・いえ、いたすら坊主がぬっと指をつっこんでしまったあんこ玉を思わせる姿がはっきり見えます。砂粒とは似ても似つきません。天に向かって、ほかんと小さな口をあげ、ちんまりとすわっている姿には、砂粒にはない「生きものらしさ」が感じられます。わたしは思わず、「いた、いた」とつぶやいていました。「あった」ではなく「いた」と、地衣体までは見えません。まるでイソギンチャクの赤ちゃんが岩にしがみついているようです。こんなに小さくても、がんばって生きているんだねえ。そう声をかけたくくなります。でも、何を言われても、「あ？」と口をあげたまんまの、とぼけた表情はかわらないでしょう。

満足して、かがめていた腰を伸ばしてみると、目の前の岩はあいかわらずのっぺりと何もついていないように見えました。それでも、今度はわずかな岩肌の変化が、ルーペの下ではどんなふうに見えるかがわかっています。いったん見つけてからは、次々にアナイボゴケとイソシズミゴケの集落が見えてくるのが、ふしぎでした。大げさに言えば、わたしの今までの世界には存在しなかった小さな潮間帯の地衣が、この時から、仲間入りした

のです。いえ、むしろ、わたし自身が潮間帯の地衣のいる世界にいれてもらったのかもしれない。

午後は波打ち際を離れ、ほぼ垂直に切り立った崖の上と下で、肉眼で見える大きさの種類を観察しました。葉状地衣はムカデゴケの仲間くらいで、あとは痾状地衣の数々です。以前は岩肌の模様くらいに思っていたものが、シロイソダイダイゴケ、ホシスミイボゴケ、ヘリプトゴケ、イワニクイボゴケ、イソクチナワゴケ、ヒメコブトリハダゴケなど、それぞれ種類の違う地衣の姿だったことを知りました。わずかな標高差でも、下から上に向かって出現する地衣の種類が変化すること、同じ高さでも日向と日陰でまた種類の違うことなどを教えていただきました。また、潮間帯で見たアナイボゴケの仲間、こちらは分厚い地衣体をもつキッコウアナイボゴケを見ながら、日当たりが強いところの地衣体は日焼けしたように黒いことも観察しました。

地衣の観察会に参加して毎回のよう感じるのは、「見えているのに、見ていないものがある」ということです。今回はさらに、見えなかったものが見えた喜びを味わいました。

毎回、地衣への愛情にあふれる解説をしてくださる原田先生、充実した観察会を企画運営して下さった世話人の方々、海岸性の地衣を共に愛であったみなさん、ありがとうございました。

## お知らせ News and Announcements

### 第26回 青空地衣教室（銀山平：栃木県日光市足尾）のご案内

#### — わたらせ渓谷鉄道に乗って足尾へ行こう —

Announcement of the 26th JSL Outdoor School on Lichens at Ginzan-daira, Nikko, Tochigi-ken / ANZAI Tadao & KINOSHITA Yasuhiro

安斉唯夫・木下靖浩：地域活性化委員会関東

[shukuhaku/ginzan.html](http://shukuhaku/ginzan.html)

参加を希望される方は、事前に下記世話人までお申し込みください。鉄道ご利用の方は東武鉄道特急りょうもう号に乗車します。全席指定ですので下記案内にご注意下さい。

\* \* \*

◆日時： 2008年9月14日（日曜日），原向駅10：45集合～通洞駅15：30解散

◆場所： 栃木県日光市足尾町銀山平

<http://www.city.nikko.lg.jp/kankou/ashio/>

◆内容： 銀山平（標高約800m）は、食虫植物コウシンソウの原産地、庚申山の南東麓に位置する、奥深い山間の小さな盆地です。冷温帯の地衣類が観察できます。キャンプ場のテントは、なんと、葉状地衣で覆い尽くされています。さて、どんな種類が見られるのでしょうか！？

◆講師： 原田浩（千葉県立中央博物館）

◆行程

10:45 原向駅集合(わたらせ渓谷鉄道はらむこう駅)  
11:00~15:00 銀山平キャンプ場周辺で観察  
15:30 通洞駅解散(わたらせ渓谷鉄道つどう駅)

◆持ち物: 飲み物, 雨具, 昼食は隣接する国民宿舎かじか荘食堂の利用が可能です(定食千円程), できれば, 10~20倍のルーペ, 「校庭のコケ(全国農村教育協会発行¥1905)を用意されるといっそう楽しめます。

◆参加費: 1000円

◆定員: 12名(確保できる車の台数によって変更の可能性があります)

◆申し込み方法: 下記世話人あてに, 利用される交通機関, 車利用の方は駅と観察場所間(約10分)で同乗可能な人数をお知らせ下さい。

◆締切9月7日, なお, 世話人は8/29~9/5出張のためメールの返信が出来ませんので, この間少々お待ちください。

◆申し込み先(世話人):

- ・安斉唯夫 kozaiwa@jcom.home.ne.jp
- ・木下靖浩 ponkichi@mtj.biglobe.ne.jp

◆現地への交通

【鉄道の例】 特急りょうもう号は全席指定です。往復ともあらかじめ指定席券を購入してください。帰りの相老駅は窓口が大変混雑しますので, 帰りの指定席券も忘れずにご購入下さい。下記時刻は乗換時間の余裕がありません。特に北千住駅の特急乗場はホームの先端で遠く, 乗換に時間を要します。余裕をもって出発してください。

▼行き(特急りょうもう号利用の場合)

東京駅7:16山手線→秋葉原駅7:20着(乗換)地下鉄日比谷線→北千住駅7:42着(乗換)東武鉄道特急りょうもう3号7:51発(全席指定)→相老駅9:22着(乗換)わたらせ渓谷鉄道9:37発間藤(まとう)行き各停→原向駅10:45着(¥3380)  
(千葉方面の場合, 千葉駅6:50発錦糸町・北千住經由となります)

▼行き(新幹線利用の場合)

東京駅7:08上越新幹線とき305号→高崎駅8:08着(乗換)JR両毛線8:33発小山行き各停→桐生駅9:22着(乗換)わたらせ渓谷鉄道9:30発間藤行き各停→原向駅10:45着(東京から¥6390)

▼帰り(特急りょうもう号利用の場合)

通洞駅15:40発→相老駅16:53着(乗換)特急りょうもう36号17:03発→北千住駅18:42着(乗換)地下鉄日比谷線→秋葉原駅18:50着(乗換)山手線→東京駅19:16着  
(千葉方面の場合, 相老・北千住・錦糸町經由千葉駅着19:45となります)

【車の例】

▼東北自動車道宇都宮IC→日光宇都宮道路清滝IC→国道122号→原向駅(渡良瀬川の対岸, 宇都宮ICから約50分, 清滝ICから約20分)

▼関越自動車道→北関東自動車道伊勢崎IC→大間々町→国道122号→原向駅(大間々から約50分)

---

## ●複製される方へ

本誌に掲載された著作物を複製したい方は, 許諾を受けてください。詳細は本誌 80号 290ページに。

### ●Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see No. 80, p. 290 of this publication.

●*Newsletter from the Japanese Society for Lichenology*, no. 88, pp. 319-322: eds. Harada H. & Kinoshita K., published by the Japanese Society for Lichenology, 30 Aug. 2008.

---

## 日本地衣学会ニュースレター 88号

発行日: 2008年 8月 30日

編集: 原田 浩・木下 薫

発行者・発行所: 日本地衣学会

〒010-0195 秋田市下新城中野

秋田県立大学生物資源科学部生物生産科学科内

---

---

©2008 日本地衣学会 (© 2008 The Japanese Society for Lichenology)

本誌記事の著作権は日本地衣学会に属します。無断転載・無断複製等は固くお断りいたします。